研　究　報　告

手術室看護師が経験している手術室看護の魅力

吉田　和美

Attractive Points of Operating Room Nursing for Operating Room Nurses

Kazumi Yoshida

キイワード：手術室看護、看護師、経験
key words：operating room nursing, nurse, experience

Abstract

The aim of this study was to clarify attractive points of operating room nursing as perceived by operating room nurses. A semi-structured interview was conducted on six operating room nurses, and attractive points of operating room nursing were analyzed using a phenomenological method.

As a result, the following two attractive points were extracted: “being able to demonstrate specialization and originality of operating room nursing” and “being able to cooperate with others as a member of a multidisciplinary team.” The first attractive point, “being able to demonstrate specialization and originality of operating room nursing,” included “improving techniques,” “contributing to the surgery progress,” “being associated with a patient as a key person in providing comfort,” “being responsible for protecting the patient,” and “being involved in risk management.” Therefore, having “expertise one can build on” was found to be an attractive aspect of operating room nursing. The second attractive point, “being able to cooperate with others as a member of a multidisciplinary team,” included “being motivated by other professions and experts,” “having a sense of duty as a team,” “having a sense of unity toward a common goal,” “having a supportive relationship,” “being able to improve through interactions with teammates,” “having a role and responsibilities on the team,” and “belonging to a reliable team.” Therefore, “being able to have hope in the team” was also identified as an attractive aspect of operating room nursing.

受付日：2011年９月13日　　受理日：2012年１月10日
日本赤十字広島看護大学看護学部　Japanese RedCross Hiroshima College of Nursing, School of Nursing

要旨

本研究の目的は、手術室看護師が経験している手術室看護の魅力を明らかにすることである。６名の情報提供者に半構成的面接を行い、現象学的手法を用いて手術室看護の魅力について分析をした。

その結果、【手術室看護の専門性・独自性を発揮できる】と【チーム医療の一員として協働できる】という２つの魅力を見出した。【手術室看護の専門性・独自性を発揮できる】は＜手技の上達＞、＜手術の進行に貢献する＞、＜安心を提供できる要として患者と関わる＞、＜患者の身体を守る責任＞、＜リスク管理ができること＞があり、手術室看護に＜成長できる専門性＞があることを魅力としていた。【チーム医療の一員として協働できる】は、＜他職種やエキスパートからの刺激＞、＜チームに駆られる使命感＞、＜共通の目標に向けての一体感＞、＜支援し合える関係性＞、＜チームで相互成長できる＞、＜チームに果たす役割と責任＞、＜信頼するチームに所属できる＞ことがあり、＜チームに希望が持てる＞ことが手術室看護の魅力として語られた。

Ⅰ．緒言

近年、わが国の医療制度改革が進むにつれて、急性期医療を担う病院では医療機能の整備が急速に進んでいる。なかでも、DPC（Diagnosis Procedure Combination）の導入は、病院の収益に重要な鍵となる手術室への改革に取り組む契機となった。さらに2010年度の診療報酬改定で、難易度の高い手術を中心に手術料が上がったことにより、各病院では手術件数の増加を目指して、稼働率を上げるために手術室の標準化と効率化が求められるようになった。このような情勢に対応すべく、昨今では、手術室への外部システム導入による業務改善（森石，2010）や手術に関わるコメディカルとの業務分担、新しい職種の創設（伊勢・笠井・小原他，2010）といった新しい取り組みも報告されてきており、これまで看護師の職務とみなされていた仕事の一部が他職種へ譲渡されることの論議がみられるようになった。このような流れは、看護職の業務の多忙さに対する改善策として、また新しい医療チームの連携の在り方として期待される一方で、手術室看護とは何か、その仕事の範疇を問われる機会であるとも考えられた。

一方、手術室看護師を取り巻く現状として、７対１の看護体制による入院基本料を導入する多くの病院では、手術室から病棟へ看護職の配置転換が行われ、配置基準の無い手術室の看護師は人員不足の苦境に追いやられているところも少なくない。このような厳しい状況の中でも、手術室看護師がいきいきと本来の仕事である看護に専念できるようになるためには手術室看護そのものの魅力を感じていることが重要であり、手術室看護師自身にとっても手術室看護とは何か、その経験の中で意味づけされていることが必要となると考えられた。これまで、手術室看護の役割や専門性については多数の先行研究において明らかにされている（深澤，1998；佐藤・若狭・土蔵他，2004；山田，2008；松嵜，2010）。しかし、これらの結果は、手術室看護に関する役割や行動といった実践から整理されたものであり、知識として理解をすることができても、なぜそれらが、手術室看護師をその仕事そのものの魅力へと惹きつけるのかは説明されていない。

今回、手術室看護の魅力という言葉を用いることで、手術室看護師が惹きつけられている、看護実践の中で捉えた看護の仕事の核心部分を浮き彫りにできる可能性があると考えた。これまで、看護の仕事の魅力自体を明らかにしようとした研究はわずかであった（與良，1997；吉田，2007）。そこで、手術室に勤務する看護師が経験している手術室看護の魅力を明らかにし、看護師が看護実践の中で捉えた看護の仕事の核心部分を考察することで、手術室看護の魅力に通じる仕事の本質を浮き彫りにすることを試みた。手術室看護師が経験から捉えている手術室看護の魅力は、手術室看護の仕事の本質を検討し、手術室看護の役割にある意味を検討するための継続教育の資料として役立てることができると考えた。

Ⅱ．研究目的

手術室に勤務する看護師が経験している手術室看護の魅力を明らかにし、看護師が看護実践の中で捉えた手術室看護の仕事の本質について考察することを目的とした。

Ⅲ．研究方法

Ａ．研究デザイン

本研究は、看護師の経験を通して、手術室看護の魅力を明らかにすることを目的とするため、現象学的手法を用いた記述的探索的デザインである。現象学的手法は、人々が現象をどのように解釈し、経験を意味づけするのかを探求する際に最も有用な方法である（Cohen, Kahn, Steeves, 2000／2005）。この方法では、研究者が経験を語っている人自身にとっての意味をあ

りのままに理解し、生きられた経験の世界を共有することに努める。それにより、特定の事実から一般的な本質への還元がなされること、つまり現象学的なものの見方により普遍的な本質を表すことを目指すことができるため、本研究で用いた。

B．研究対象施設と情報提供者

A県にある総合病院２施設を対象にした。B施設は約600床を有し年間手術件数は約4,500件であった。C施設は約300床を有し年間手術件数は約1,000件程度であった。これらの施設の手術室に５年以上勤務しており、現在、手術室看護に魅力を感じながら前向きに仕事に取り組まれている手術室看護師６名を情報提供者とした。情報提供者となる手術室看護師について、その仕事ぶりを良く知る立場となる手術室看護師長が、手術室看護に魅力を感じ前向きに仕事に取り組んでいると判断した候補者の紹介を受けた。更にその候補者へ研究の主旨を説明する際、情報提供者の条件に当てはまるかどうかを本人に確認した。

C．データ収集方法

看護部長に研究計画書の説明を行い、研究協力の了承を得た。その後、手術室師長より、情報提供者となる手術室看護師を推薦してもらい紹介を受けた。個別に同意が得られた情報提供者にインタビューガイドを用いて、１人当たり約60分前後の半構成的面接を実施した。面接では、手術室看護師の手術室看護の魅力に対する個人的な思いや考えを排除し、手術室看護の仕事での出来事と関連付け、看護師が生きられている状況と世界について説明しながら意味づけたことを語れるように「あなたが、これまで看護の仕事を続けてきたことに繋がっている手術室看護の魅力について、これまでの看護実践の場面を通じて教えてください。」と問いかけた。面接中は、情報提供者の発言にはどのようなことでも聞き続ける姿勢で臨み、情報提供者が語ったことを研究者が共有するために、内容を確認したり理解したことの反応を返したりし、双方向で情報がやり取りされるよう進めた。情報提供者が語った内容に対し、分析的な質問はせず、語られた場面をできるだけ詳しく語ってもらえるように努めた。面接内容は情報提供者の了承を得てICレコーダに録音した。面接時の情報提供者の様子をメモに取り、録音内容を起こした逐語録と合わせてデータとした。

D．データ収集期間

2009年12月～2010年２月

E．分析方法

逐語録は丹念に再読を繰り返した。情報提供者が手術室看護の魅力として語っている場面について、その詳細に注意しながら個々の単位でテーマを見出した。そして、個々の単位のテーマを踏まえた上で、情報提供者が語った場面全体をひとつのまとまりとして、テーマを収束させ暫定的な理解をした。そして、データ全体の意味について更に深く理解するために、再び詳細に個々の単位のテーマに戻り、再検討することを循環して行った。新たな情報提供者への面接を重ねていく過程では、これまでの分析で見出したテーマを手がかりにして理解を洗練し、より精細に吟味するよう努め、個々のテーマの意味を解釈し、全体の意味を捉えることができるよう検討を繰り返し、カテゴリー化し命名した。

分析の妥当性を確保するために、手術室看護の臨床経験を持ち、質的研究経験のある研究者にスーパーバイズを受けた。

F．倫理的配慮

本研究は日本赤十字広島看護大学の研究倫理委員会の審査・承認を受けて実施した。（審査番号0904）

情報提供者には、説明書を渡し口頭で説明した。研究協力後も辞退ができるよう同意取消書と返信用封筒を手渡した。上司を介さず連絡が取れるよう説明書には連絡先を明記した。面接場所および時間は情報提供者の心身へ負担の無いように調整した。公表する際は匿名性を保障し、研究データおよび結果は研究目的以外には用いることはないこと、調査終了後には消去・破棄することを約束した。

Ⅳ．結果

A．情報提供者

情報提供者はA県２市の総合病院に勤務する手術室経験年数が７年～16年の６名であった。情報提供者には、病棟勤務経験者４名、管理者２名を含んでいた。また、教育面では全員がプリセプター等の教育的役割を持っていた（表１）。面接時間は、１回あたり40分から70分で平均63分であった。

表1．情報提供者の概要

性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性
手術室経験年数	5年以上	5年以上	10年以上	5年以上	5年以上	15年以上
看護師経験年数	10年以上	10年以上	25年以上	10年以上	5年以上	15年以上
病棟経験	あり	あり	あり	あり	なし	なし
役割	プリセプター	プリセプター	係長	アソシエート	チームリーダー	係長

B．手術室看護の魅力

分析の結果から、【手術室看護の専門性・独自性を発揮できる】と【チーム医療の一員として協働できる】という２つの魅力を見出した（表２）。なお、カテゴリーは【　】、テーマは＜　＞、コードは〔　〕、インタビューで語られたデータの引用は「　」で示し、データの補足内容は（　）で追記した。データの巻末に括弧書きで表したアルファベット番号は情報提供者を示す。

１．手術室看護の専門性・独自性を発揮できる

【手術室看護の専門性・独自性を発揮できる】では、先ず手術室に配属された多くの看護師にとって登竜門ともなる器械出し技術について、それを身に付ける過程での経験が＜手技の上達＞という魅力として語られた。器械出しの技術を身に付ける過程で「手技とか上達していく実感がやっぱり１年２年めまぐるしくありますよね。１年２年３年ぐらいの時はすごく充実感が出てきて（C）」と〔器械出しの手技が上達すること

表２．手術室看護の魅力

カテゴリー	テーマ	コード
手術室看護の独自性・専門性を発揮できる	手技の上達	器械出しの手技が上達することの充実感
		手技習得の明快なステップアップにある達成感
	手術の進行に貢献する	手術の流れ・リズムに乗れる
		“1秒もロスしない” 手技による手術の時間短縮への貢献
		医師の心理的負担に配慮できる器械出し
	安心を提供できる要として患者と関わる	患者が抱えている困難の第一発見者になる
		患者のできる限りの希望に添えるように調整役となる
		患者を取り巻く人々への配慮ができる
		治療やケアの成果を見る喜び
		患者の“人生の一大イベント”に関わるという役割
	患者の身体を守る責任	患者のすべてが看護の手に委ねられている責任
		患者の声に変わって安楽を追求できる
	リスク管理ができる	術野の安全管理を主導する
		手術が“無事に終わること”を支えている役割
		“無事に終わること”の喜び
	成長できる専門性	役割の中で発案し方法を創り出すことができる
		自立して評価を拾い課題と目標が持てる
		進歩する医療技術に精通する楽しさ
		医療技術の未来への可能性
カテゴリー	テーマ	コード
チーム医療の一員として協働できる	他職種やエキスパートからの刺激	際立つ善意への感動
		他者の志に触れ刺激を受ける
	チームで駆られる使命感	“毎回が特別な1回”という緊張感
		使命を帯びる特別な体験
	共通の目標に向けての一体感	チームメンバーの強い結束
		メンバーと共通の目標を持てる
	支援し合える関係性	メンバーとの助け合い
		循環するケアリングマインドを実感できる
	チームで相互成長できる	後輩が成長する喜び
		チームの力に支えられる
		チーム全体で育つ
	チームに果たす役割と責任	手術のコーディネーターとしての役割
		チームを形象するメンバーの織り成すカラーがある
		チームに責任を果たせる喜び
	信頼するチームに所属できる	患者中心に動くチームの一員であること
		尊敬するメンバーと共に在ること
		メンバーと理解し合えること
	チームに希望が持てる	将来への希望がある

の充実感〕を経験していた。そして、それは「ちょっとずつステップアップして、ついていくことは嬉しかった（A）」と〔手技習得の明快なステップアップにある達成感〕として語られた。

手技の上達によって手術室看護師は＜手術の進行に貢献する＞ことに充実感を持てることを語った。「待つ時間が少なくなるとすごく流れは良くなるので。次、何がいるんだろうっていうのがわかるようになる。（E）」と〔手術の流れ・リズムに乗れる〕ことが重要であることを語った。そして、「（医師の）呼吸が読めて来て、１秒もロスしないように準備して、もう大体そうやってくるとやっぱり直接介助をやっていて、ああ面白いな、ただ純粋に、面白いなって思う（A）」と〔“１秒もロスしない”手技による手術の時間短縮への貢献〕ができることや、「先生（術者）だって人間なんだから不安（A）」と〔医師の心理的負担に配慮できる器械出し〕ができることが語られた。

一方、手術室看護師の間接介助の役割を中心として＜安心を提供できる要として患者と関わる＞ことが語られた。これは、術前訪問の際に患者のふとした様子から「並々ならぬ思い（A）」を感じたり、短時間のコミュニケーションの中で「内に秘めている思いを察する（C）」ことを通して〔患者が抱えている困難の第一発見者になる〕こと、そして、〔患者のできる限りの希望に添えるように調整役となる〕ことであった。

「私は患者さんがこうして欲しいっていうことがあれば、可能な限り添うのが看護師だと思うんですよ。手術して治すのは先生なので、『私（患者）は御主人の手を握って麻酔導入を迎えたい』って、そばにいて、家族がいて、麻酔導入してほしいって言われれば、それはできるだけそういう風にしてあげたいし。（F）」

手術室看護師は患者からの具体的な要望や様子から察して発見した患者が抱えている困難に対して可能かどうか判断しながら方針を決め、他職種との調整の役目を果たすことを魅力としていた。手術中には「家族も気が気じゃない状態（B）」であることに注目し、家族への配慮と関わりを大切にし、〔患者を取り巻く人々への配慮ができる〕ことが語られた。

術後訪問では〔治療やケアの成果を見る喜び〕があることを語り、手術は「人間にとって人生において大きな出来事（C）」であることに注目し〔患者の“人生の一大イベント”に関わるという役割〕を魅力として語られた。

手術室看護師はこのような役割を通して看護師独自が果たすこととして＜患者の身体を守る責任＞を語った。〔患者のすべてが看護の手に委ねられている責任〕があることを自覚し、それらを〔患者の声に変わって安楽を追求できる〕ことを誇りとしていた。「目が覚めたら声は聞けますけど、寝ている間は自分らが見ていく部分（D）」、「言えない患者さんの代わりに、自分がいかに言ってあげられるか、言ってあげられなかったら、それは外回り看護師として失格（F）」と意識の無い患者の声を代弁する役割こそが手術室看護師の存在意義であり仕事の魅力となっていることが語られた。

また、手術室看護師は＜リスク管理ができる＞ことに言及した。「ほんと細かい事ですけど１本の絹糸切った先とか、何かねじとか、そうゆう安全管理なんか、もちろん先生（医師）は、そんな気遣っていられないので、やっぱり手術一生懸命になっているので、その辺はもう付く看護師はサポートじゃないけど、そっちの方面の事はちゃんとカバーしないと、それが安全な手術って事になる（A）」と語り、手術中に〔術野の安全管理を主導する〕ことを語った。そして、手術中だけでなく、手術が安全に終了するために〔手術が“無事に終わること”を支えている役割〕があることの魅力を語った。「いつも通りの物（器械）が網羅されてないといけない。滞りなく、そうゆう下準備というか、準備とても大切な部分ですね。（中略）胸写がなかったりとか、心電図がなかったりとか忘れていることあるので、ほんと目を光らせておかないと。（A）」と手術までの滞りの無い準備と入念な遵守事項の確認について語られた。これらの役割が果たせて、「流れる水のように手術が進んで、患者さんが無事に、元気に帰ったら、それで、ああよかった、終わったって思う（A）」と、〔“無事に終わること”の喜び〕を語った。

手術室看護師が最終的に語った手術室看護の魅力は＜成長できる専門性＞があることであった。手術室看護師は「看護的な視点でドクターとは全然違う（A）」と語り、「寄り添って理解しようとしている、語られなくても感じてあげたい（C）」という看護師自身の「すごく人間の基本的なところにある（C）」感覚を用いた視座で〔役割の中で発案し方法を創り出すことができる〕ことを魅力としていた。手術終了後の術後訪問では、「病棟に行って、『やぁ、もう元気に歩いているよ』と言われると、あー良かったんだ、あの看護は良かったんだって（F）」と自己の実践について〔自立して評価を拾い課題と目標が持てる〕ことが語られた。そして、手術室看護師は自己の仕事を概観し〔進歩する医療技術に精通する楽しさ〕や、〔医療技術の未来への可能性〕があることを魅力として語った。

２．チーム医療の一員として協働できること

【チーム医療の一員として協働できること】では、先ず＜他職種やエキスパートからの刺激＞が魅力として語られた。緊急で難易度の高い手術で「先生も何かあったら俺が責任持つみたいな、ちょっとこう、熱いって言ったら変ですけど、だから、どんな患者さんも助けるし、どんなに条件が良くなくても、患者さんとこう、治すみたいな感じ（B）」と、協働する他職種

の言葉や緊張感から、〔際立つ善意への感動〕があることを語った。また、別な手術室看護師は「（患者さんが）助かって帰って行かれたんですけど、その時に良かったねって私たちは乗り切れたっていう事で、もう満足してたんですけど、『もっとスムーズに出来なかったかしら』って言われたんですね。それがほんと１分１秒の大事さとか、こう総合力っていうか、そういうことなんだなって思って。（中略）命が助かって出て行かれた事に対して満足感だけでやっぱり日々を終わっていたらいけないんだなって。（C）」と〔他者の志に触れ刺激を受ける〕ことを語った。

手術室看護師は患者にとって手術は「その人の人生の一部分（C）」と語り、「何かあってからじゃ遅いんで、その１回しかない事なんで（A）」と〔“毎回が特別な１回”という緊張感〕を持つこと、そしてそのような緊張感の高い場面の中でチームからの刺激を受けて〔使命を帯びる特別な体験〕があることを語った。

「看護師として、今しなければ、今出来ることを精一杯やってその人の命を守るんだっていう経験をしまして、（中略）麻酔科の先生が、この人絶対助けるんだって言われた一言に、自分は、今自分が出来ることを精一杯やらないと、何しているんだっていう気持ちになったのを、その人一人の命がもう今その瞬間にかかっているっていう状況の中で、私は救うんだというその麻酔科の先生、絶対救うんだっていう、その一言によって。（C）」

手術室看護師は日常的な体験ではないが、看護師として役割を果たす現在の自分につながっている大切な過去の体験のひとつとして、＜チームで駆られる使命感＞を持てたことを魅力として語った。

チームの中で手術室看護師は「手術室ってこうチームって言ったら変ですけど、その１人の患者さんを取り巻く、まあ麻酔科医だとか主治医だとか、なんかすごく密接してる、先生同士と近いし、スタッフ間がすごくこう、熱いというか、なんかこう結束が固いというか、この１人の患者さんをどうにかしなくちゃいけないんだみたいな感じのオーラがすごくこう出てた（B）」と感じ取り〔チームメンバーの強い結束〕に注目し、目指していることを「共通してわかってる人達とやっている（B）」という〔メンバーと共通の目標を持てる〕ことを挙げ、＜共通の目標に向けての一体感＞が魅力として語られた。

そこでは、「みんなで助けあいながらやっていける（A）」という〔メンバーとの助け合い〕を感じ、「私自身がその時にちょっとこう声をかけてもらったりすることでほぐれる事がたくさんあるので、それをお返しする。（C）」と、〔循環するケアリングマインドを実感できる〕と語り、＜支援し合える関係性＞があることを魅力としていた。

また教育的役割を担う手術室看護師は、「周りの人があの子（新人）ここまで出来るようになったよねとか、そういうふうに言ってもらったら、ああ良かった、分かってきてくれたのかな。（B）」と〔後輩が成長する喜び〕を感じ、自己もまた「自分も成長させてもらっている（B）」と語った。管理的立場にある手術室看護師は「サポートが、彼女達があるからこそ、できているっていうところに感謝して（C）」いると、〔チームの力に支えられる〕ことを実感し、〔チーム全体で育つ〕ことを自覚し＜チームで相互成長できる＞ことが魅力として語られた。

また、手術室看護師は＜チームに果たす役割と責任＞があることを魅力としていた。これは、「気持ちよく手術ができなかったら、ひいては患者さんに還ることなので、やはり術者が気持ちよく、麻酔医が気持ちよく麻酔をかけられるように、コーディネート、隙間を埋めるようにしてあげる。（F）」と手術室看護師が語るように〔手術のコーディネーターとしての役割〕がうまく機能することが語られた。また、「私のポリシーは笑顔を絶やさないということなんで（中略）緊張の中にも少し和らぐっていう時間を少しでも持てたら、ご家族の人もご本人もスタッフ同士でも（C）」と手術室看護師が個人で大切にしていることがチームに受け入れられ、そのチームらしさとして〔チームを形象するメンバーの織り成すカラーがある〕ことが挙げられた。そしてそのような役割や個人の資質や持ち前のようなものが発揮できることで〔チームに責任を果たせる喜び〕となることが語られた。

手術室看護師は自己が所属するチームに対して、「オンとオフの切り替えじゃないですけど、オンの時にはすごいんですよ、みんな。（B）」と〔尊敬するメンバーと共に在ること〕を語り、「スタッフの良いとこも悪いとこも知って、やっぱり長い時間一緒にいるたりするし、下手したら家族よりも一緒にずっといるんですよね、なにか話しても分かるし。中身の濃いっていうか、スタッフとも、あうんの呼吸だったり。（B）」と〔メンバーと理解し合えること〕を挙げた。そして、「一つ始まり出したら、いざ患者さんが入ってきたら、ふっと空気が変わる感じですよね。オンになったら、空気が変わって、そうゆう人達とこう、やってる感じがみんな結構看護に対して熱いというか、ここはこうだったとかああだったとか、すごく見ているんですよね。（B）」と〔患者中心に動くチームの一員であること〕に満足感を示し、「ヒマワリみたいに同じ方向に、日が当たったらこっちに向くみたいな感じで楽しいんだと思うんです、多分。なんだかんだいってその人達と仕事するのが辞められないっていうか。（B）」と語り、＜信頼するチームに所属できる＞ことを魅力としていた。

最終的に手術室看護師は、〔将来への希望がある〕ことを挙げた。「まだまだ自分たちが手術室看護師と

してできることがいろいろある。（F）」と看護実践への可能性を語った。また、「豊かさの中に裏づけられていくものと自分が経験を通してまた学びを重ねていかれるのと、すごい人になるんだろうなと思って、新人さんみたら楽しみ。（C）」と、自他共に成長へ向かう確信と後輩への期待を込めて＜チームに希望が持てる＞ことが魅力として語られた。

Ⅴ．考察

本研究の分析結果から、手術室看護の魅力として【手術室看護の専門性・独自性を発揮できる】と【チーム医療の一員として協働できる】という２つの魅力を見出した。手術室看護の魅力として語られたものは、手術室看護師が行っている価値ある看護実践であり、経験の中で仕事そのものにある価値として意味づけされながら、行われている看護のありようが表現されたものであると考える。手術室看護の魅力は、手術室看護の特徴を表す専門性や独自性が発揮できること、また発揮された時の充実感や喜びであると言える。これまで、手術室看護の専門性を探求する研究がおこなわれてきているが、江口（2008）は手術室看護が具体的な業務内容で表せる場合や目標達成のレベルで表現される場合があり、手術室看護の概念は未だ曖昧であると指摘している。以下からは、手術室看護師が語った手術室看護の魅力から、手術室看護という仕事の核心部分がどのようなこととして捉えられていたのかを考察していく。

Ａ．手術室看護の魅力から見える“非日常性を緩和する”手術室看護

【手術室看護の専門性・独自性を発揮できる】ことの中で、手術室看護師は周手術期を通して、＜安心を提供できる要として患者と関わる＞ことを手術室看護の魅力としていた。手術室看護師は、術前の限られた時間の中で〔患者が抱えている困難の第一発見者になる〕のである。患者が手術を受けるにあたり抱えている不安のその具体的中身を知ることに、手術室看護師が注目するのは、〔患者のできる限りの希望に添えるように調整役となる〕ことを看護の役割として自覚していることにある。患者にとっての手術は、これまでの日常とかけ離れた未知のものであり、避けられるものではないが、この非日常性を出来限り最小なものに緩和することに手術室看護は価値づけされていると考えられた。

手術室看護師は患者の身体に起こる非日常性に注目している。器械出しをする直接介助看護師が〔術野の安全管理を主導する〕ことに重きを置き、外回り看護師が〔患者のすべてが看護の手に委ねられている責任〕を自覚し、〔患者の声に変わって安楽を追求できる〕ことを誇りとするのは、手術により大きく切り開かれた身体や麻酔により呼吸循環といった生命の根幹を支える機能に侵襲を与えている手術という治療の場で、患者の身体に起こっている非日常性を緩和することに価値づけられていると言える。そして、この非日常性が痕跡を最小限にして通り過ぎることを追求し、再び日常を取り戻せるだろうことを見通せた時、〔“無事に終わること”の喜び〕を持てることは、手術室看護の醍醐味であると考えられた。術後訪問では、患者の術後の身体状況を確認し、会話し反応を得ることで〔自立して評価を拾い課題と目標が持てる〕ことが手術室看護の魅力として語られた。これは、手術後の患者が身体的にも精神的にも再び日常を取り戻しつつあることを確認することで、看護実践を評価し、看護専門職としての自律した役割行動として重要な責務を果たしていると言える。

手術室における看護師の業務は、そのほとんどが「診療の補助」業務である（山田, 2008）と言われており、本研究においても、その特徴的な業務である器械出しについて、＜手術の進行に貢献する＞ことが手術室看護の魅力として語られた。しかし、手術室看護師が〔医師の心理的負担に配慮できる器械出し〕や〔“１秒もロスしない”手技による手術の時間短縮への貢献〕に価値を置くのは、スムーズな診療の補助業務を行うためではなく、患者におこる非日常的な身体状況を最小限に食い止めるための努力に価値が置かれているためであると考える。つまり、手術室看護師は、患者の行く先にある生活を見通して、日常を取り戻すための働きかけとしての援助に重きを置いていると言える。これは、Nightingale（1860／1988, p.3）が、看護とは、患者の生命力の消耗を最小に整えることを意味すると述べていることを踏まえると、看護の普遍的本質に一致していると言える。さらに、日本看護協会では「診療の補助」とは、看護職が患者にとっての意味を考え、診療を受ける患者をサポートするものであり、患者の側に立った視点が明確にあって初めて看護と言える（日本看護協会, 2007, p.13）と説明している。しかし、この「診療の補助」という言葉からは、診療を受ける患者のサポートというよりはむしろ、診療業務のサポートが看護の主たる業務であるかのような印象を与えている。手術室に異動になった看護師の中には、「手術室には看護が無い」、「やりがいが見いだせない」と苦悩する者がいるが、手術室看護は、患者の日常を見通し、診療の場で起こる非日常性を緩和する価値ある看護実践であり、看護の普遍的本質に寸分違わないことを充分に表現していく必要があると言える。

Ｂ．手術室看護の魅力につながるチームの一員としてのあり方

手術室看護師は他職種と協働する場面が多く、看護師同士でも常に連携を求められる。そのため、看護職としての役割が果たせるために、どのようにチームの

人々と繋がっているのかが仕事の魅力を感じるかどうかに深く関わってくると考えられた。【チーム医療の一員として協働できる】ためには、チームに＜支援し合える関係性＞があり、互いに育み育まれ＜チームで相互成長できる＞ことが必要である。チームワークの本質とは、すべてのメンバーにおける相互支援を発達させ、持続させることだ（Schein，2009／2009，p.177）とも言われている。本研究の結果を踏まえると、チームの支援を発達させ、持続させるための重要な手がかりとして、個々が気遣いを絶やさず〔循環するケアリングマインドを実感できる〕こと、個々の成長は〔チームの力に支えられて〕いることを謙遜的に自覚していること、メンバーから学び〔尊敬するメンバーと共に在る〕ことを自覚していること、メンバー個々の存在価値を見出し〔チームを形象するメンバーの織り成すカラーがある〕ことへの気付きが挙げられる。以上のようなチームの一員としての自覚のあり方が、個々の多様な能力の発揮に繋がり、〔チームに責任を果たせる喜び〕を手術室看護の魅力として手術室看護師に語らせるのである。昨今、新人看護職員研修の制度化を皮切りに新人看護師教育に関する話題が注目されているが、新人看護師から学ぶことをも楽しみ、経験年数を問わず学びあう姿勢から語られた＜チームに希望が持てる＞という魅力は、手術室看護師のチームの一員としてのあり方によって見出されたものであろう。

手術室看護師が捉えた手術室看護の魅力として特徴的なことは＜他職種やエキスパートからの刺激＞を受けることである。これらは、重症患者の緊急手術での場面で語られたものであった。緊急時の対応は、手術室看護の専門性の１つとして挙げられる（深澤，1998；中村・長谷部・平井他，2004）ところではあるが、これらが手術室看護の専門性を発揮できることに注目して語られたのではなく、＜チームに駆られる使命感＞を持てる特別な体験として手術室看護師に意味づけされていたことは興味深い。手術室看護師は、緊急時のような切迫した場面に、他職種を含めたチームメンバーの信念や価値観といった個人の役割の表層部分以上の理解に触れる機会に出会い、自分自身の役割についても、より深く納得し仕事の意味づけをおこなう機会となっていると言える。他職種を含めたチーム活動を意識的に行い、それぞれの役割にある仕事への信念や価値観について共有し承認し合うことは、チームの結束を強めると同時に自己の役割を再認識でき、より良い協働関係の構築に繋げる上で重要であると考えられた。

C．本研究の限界と今後の課題

本研究の情報提供者は、１県２市の総合病院の看護部から紹介を受けた手術室看護師の方であった。そのため、今回明らかにしたものをすべての手術室看護師の方の手術室看護の魅力として一様に適用することはできない。手術室の規模や勤務形態の異なる看護師、５年目未満の手術室看護師、男性看護師が経験している手術室看護の魅力について調査を重ねていく必要がある。

Ⅵ．結論

手術室看護の魅力として、【手術室看護の専門性・独自性を発揮できる】と【チーム医療の一員として協働できる】という２つのまとまりを見出した。

【手術室看護の専門性･独自性を発揮できる】ことは、手術室看護師の特徴的な業務として直接介助の＜手技の上達＞に達成感を持ちながら、＜手術の進行に貢献する＞こと、周手術期を通して、＜安心を提供できる要として患者と関わる＞ことを手術室看護の魅力としており、そこには、手術中に意識の無い＜患者の身体を守る責任＞があること、＜リスク管理ができること＞が魅力となっていた。さらに、手術室看護に＜成長できる専門性＞があることを手術室看護の魅力としていた。

【チーム医療の一員として協働できる】こととして語られた手術室看護の魅力は、濃密な治療現場において専門職の情熱に触れ、＜他職種やエキスパートからの刺激＞を受けること、＜チームに駆られる使命感＞を持ち、チームで＜共通の目標に向けての一体感＞を持てることであった。そして、チームに＜支援し合える関係性＞があることを実感し、その中で、後輩の成長に喜びを感じながら、互いに育み育まれ＜チームで相互成長できる＞ことが語られた。また、様々な場面で自分自身が＜チームに果たす役割と責任＞があること、尊敬できるメンバーとともに＜信頼するチームに所属できる＞ことを喜びとし、＜チームに希望が持てる＞ことを手術室看護の魅力としていることが語られた。

手術室看護の魅力は、手術を受ける患者に起こる非日常を緩和することが看護の仕事の重要な部分として認識され、手術室看護の専門性・独自性を発揮できることに価値が置かれていると考えられた。チームで協働し生き生きと仕事をするために、経験年数を問わず学び合うチームの一員としてのあり方が重要であり、他職種を交えてチーム活動を積極的に行いお互いの役割について共有し、承認し合うことの必要が示唆された。

謝辞

お忙しい中にも本研究にご快諾くださり、貴重な御経験をお聴かせくださいました皆様方に心から感謝申し上げます。本研究の一部は第11、12回日本赤十字看護学会学術集会において発表しました。本研究は平成

21年度日本赤十字看護学会の研究助成を受けて行いました。

文献

Cohen, M.Z.・Kahn, D.L.・Steeves, R.H.（2000）／大久保功子（2005）．解釈学的現象学による看護研究―インタビュー事例を用いた実践ガイド　看護における質的研究２．東京：日本看護協会出版会.

Schein, E.H.（2009）／金井壽宏（2009）．人を助けるとはどういうことか　本当の「協力関係」をつくる７つの原則．東京：英治出版株式会社.

江口裕美子・湯沢八江（2008）．手術室看護師の業務に対する意識の一考察．日本看護研究学会雑誌，31（4），101-110.

深澤佳代子（1998）手術室看護の専門性．日本手術医学会誌，19（3），312-314.

伊勢健太郎・笠井卓・小原春美・坂井哲博（2010）．手術器械出し専門職員（スクラブテクニシャン）の育成と臨床活動に関する検討．看護管理，20（2），122-125.

松嵜愛（2010）．認定看護師の立場で考える．手術看護の独自性と専門性．手術医学，31（4），22-25.

森石好江（2010）．魅力ある手術看護への挑戦－手術看護へ専念するための取り組み．看護管理，20（2），131.

中村恵・長谷部佳子・平井さよ子・森田チエコ（2004）．手術室に勤務する外回り看護師の専門的自律性と看護実践．日本看護研究学会雑誌，27（4），35-43.

Nightingale, F.（1860）／湯槇ます・薄井坦子・小玉香津子・田村真・小南吉彦訳（1988）．看護覚え書（第４版）．東京：現代社.

佐藤紀子・若狭紅子・土蔵愛子・佐藤あゆみ・西田文子・遠藤和子（2004）．手術看護の専門性とその獲得過程に関する研究．OPE nursing，19（1），34-42.

社団法人日本看護協会（2007）．看護にかかわる主要な用語の解説－概念的定義・歴史的変遷・社会的文脈－．東京：社団法人日本看護協会.

山田豊子（2008）．日本手術看護の歴史から観た専門性の課題．京都市立看護短期大学紀要，33，29-37.

與良登美代（1997）．看護の魅力　看護者を看護に魅きつける要因について．神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，22，1-6.

吉田和美（2007）．患者との関わりの中で臨床看護師が経験している看護の魅力．日本赤十字広島看護大学大学院看護学研究科　修士論文.